



中廣寺之印為字號

明治三十六年三月

崇廣

第拾八號

滋賀縣立第一中學校崇廣會

◎崇 廣 第拾八號目次

●論評考説

○安土山と織田信長の經綸	特別會員	小川廉三郎
○貧家の子女に告ぐ	特別會員	伊藤榮三郎
○体操概歴	特別會員	水野透
○立志に就て	第五年級	廣部智圓
○試験を論ず	第五年級	野村義雄
○詭譎	第五年級	廣瀬文豪
○厭世家論	第四年級	橋本久一
○文章論	第四年級	野村佐一郎
○築港と我國	第三年級	外村孝三
●文 苑		
○紀元節祭場の諄辭	特別會員	伊藤榮三郎
○月嶋丸と共に沈没せし亡友を悼む	特別會員	松浦益雄
○四國だより	特別會員	新井無二郎
○取者物語	第五年級	澤村胡夷
○虹と沙彌	第五年級	木村仙夢
○あはれなき兄	第五年級	那須開神
○山住と春の桃林	第四年級	中村竹坡
○朧月夜	第四年級	金谷杏甫
○ふる郷	第四年級	山本繁七
○亡き父母	第三年級	徳永乾堂
○旅の二日	第三年級	北村力
○高野のみち	第三年級	村上義一
○管山寺に詣つ	第三年級	藤田僕

○冬期休暇	第三年級	西川修三
○春けしき	第二年級	秋篠義一
○春雨	第二年級	徳永英
○修學旅行記	理	事
○永源寺紀行	第三年級	飯村祐念
○鑿のひかり	第五年級	澤村胡夷
○花賣る少女	第五年級	野村靜軒
○賤が岳の夕	第四年級	中川胡風
○和歌三首	特別會員	文通舎歌麿
○和歌四首	特別會員	福永作十郎
○春の水	第五年級	木村仙夢
○ふにくれ集	第五年級	野村靜軒
○がらくた集	第五年級	廣瀬紅々
○和歌三首	第三年級	飯村吳山
○すみれ草	第五年級	野村靜軒
○俳句	第四年級	北川九一郎
○俳句	第一年級	丸山房太郎
○祭森有禮君文	特別會員	樋口樸堂
○漢詩二首	第四年級	中村竹坡
●雜 録		
○有聲無聲 (一)	特別會員	新井無二郎
○隨感小錄	特別會員	樋口無我
○軍事學野外勤務の概要	特別會員	福永作十郎
○天來の白矢	第五年級	門根米次郎
○卒業生諸子に檄す	●雜 報	
○十數件		

崇 廣 第拾八號



論評考説

安土城と織田信長の經綸

小川 廉三郎

我が金龜城下を距る西南數里、八幡町あり、蒲生郡の名邑たり、邑の東北里許、小丘あり、湖畔に崛起し、頂上三重の高塔樹間に隱見す、之れ實に安土山たり、丘は高さ二町許周回一里有餘、嘗て織田右府の城きし所、七重の天守は高く雲漢に聳え殿舎樓閣輪奐の美を極め、諸侯の、邸第丘腹に列り、中央霸府として天下政令の中心たりし處、今や僅に殘礎斷壁を、荒草の中に存するのみ、行人をして、往時を追懷して轉た感慨にたえざらしむ、いでや往時に溯りて、右府が築城の理由につきて聊考説を試みん、』

天正三年十一月、信長家を嫡子信忠に譲りて、岐阜に居らしめ、翌年正月より、安土築城の工を起し、二月自ら之に移り、更に天主の工を起し、四月大阪本願寺に事あり、一時工事を中止せしが、七月に至り再び工を起し、數年あらずして大に成る、佐和山城主丹羽長秀工を督し、尾張美濃近江伊勢三河越州若州畿内諸國の諸士及び京都奈良堺の工人等を徴し事にあたらしめ、結構壯大美麗を極む、信長何の視る所ありて地を安土に相せるか、先づ當時織田氏及び比隣諸國の形勢と地理上安土の位置とを攷察して築城の理由に及ばんとす

信長尾張に起り、一たび桶峽に勝ちてより威名漸く揚り、齋藤氏を亡して美濃を併せ、將軍を奉して京師に入れ、上杉武田北條の諸雄が互に相争ひて旗を上國に進むる能はざるに乘し、畧近傍諸國を定め天正元年には既に淺井朝倉二氏を滅して近江越前二州を服し、進て加賀に及び將軍義照京師にありて虚器を擁せしも槇島の一敗、虚位實權全く共に之を失ひ、近畿全く信長に歸し其領有する所美濃尾張伊賀伊勢近江越前、畿内諸國丹波若狹の一部に及び自ら岐阜に在りて之を統轄せり、

當時國大に兵強く織田氏に抗するに足るもの、上杉氏越後にあり、上信の一部を服して越中に及び、武田氏は甲駿の地に占據し、其兵甚た強く、皆機を見て西上を計り、北條氏相武の地を領して關東の強たり、毛利氏は既に元龜の末年に於て防長藝備雲石因伯の諸州を領して、播磨に迫り、四國には三好の党ありて、動もすれば京畿の地をつかんとす、信長天下を定めんと欲せば之等の諸強と衡争を免るゝ能はず、乞ふ少しく之等諸強と信長との關係につきて、語る處あらしめよ、

始め足利義照信長の力によりて京師に還るを得たりしも實權悉く信長に歸して徒に虚器を擁するのみ心中常に平ある能はず、屢使書を武田上杉二氏に遣して信長の後を衝かしむ二氏も亦名を將軍に假りて旗を上國に進めんとし、將軍既に敗れし後も、二氏は常に機を見て西上を計れり、然れども天正元年信玄死し、子勝頼志を繼ぎしも長篠の一敗多く宿將老臣を失ひ勢漸く弱く、加ふるに徳川家康三河にありて、兵頗る強く、常に信長の東鎮とありて、武田氏攻撃の衝にあたり、よく之を支えたり、されば信長は武田氏に對しては後顧の憂あかりき、

信玄未だ死せず、武田氏猶強きにあたりては、信長は武田氏牽制の方略として、己を卑くして歡を謙信に求めしも、信玄の死後信長は直に上杉氏に對する防禦策を講し婚を越中の神保氏に結ひて謙信に備へ進んで加賀を畧し、老臣柴田勝家に越前を賜ひて福井に居らしめ、前山金森佐々等諸將を之に属せしめ、以て上杉氏に備へしめたり、

北條氏は關東の強族ありと雖も、信長とは地を隔つること遠く、而も民政は庸將にして大器にあらず、且地理上武田上杉二氏と連和するにあらずんば兵を上國に出す能はず、而して事情は到底三氏の一和を許さず、信長此間にありて慣用の外交手段を用ひ、三氏をして互に相牽制せしめば上杉氏強大ありと雖も未だ俄に大舉西上の計に出る能はず、而して既に柴田以下の諸將賀越にありて其鋒を支ふるあり、信長の急務は實に毛利氏に備ふるにあり、

毛利氏兵強く國大にして、元就既に没せりと雖も、元春隆景力を協せて輝元をたすけ、其勢隆々侮る可らず、始め毛利氏大伴氏と兵を構ふるや尼子勝久虛に乘して兵を起すあり、毛利氏前後敵を受くるに苦み、信長亦四國の三好黨を亡さんことを欲し、毛利氏に結ばんとするの意あり、兩々交々相利せんとして一時連合せりと雖も、兩者を眞意は共に和好にあらず、されば信長は尼子勝久の敗れて來り投するや、陰に之を保護し、備前の浦上氏播磨の別所氏小寺氏の如き、毛利氏の壓迫を恐れて款を通するや皆之を許し、浦上には備前美作播磨三國の朱印を與へ、小寺氏の士黒田孝高に中國征討の嚮導を命し、天正元年元春の因州を定めて軍を班すや信長は尼子山中を助けて但因二州に侵入せしめ備中松上の城主三村元親を誘ひて毛利氏に黨せる浮田氏に敵せしめ明智光秀を遣りて但馬の山名祐豐を誘ひしが如き、陰に毛利氏の進路を抗止するを怠らざりき、然れども大阪に本願寺あり、畿内未だ全く平定せず、將軍義照の紀泉地方に流寓して將に毛利氏によりんとするあり、信長は毛利氏の之等と連合せんことを恐れ、公然和好を破るを敢てせざりしが、天正三年二月に至り、義照備後の鞆津に至りて毛利氏により、信長の本願寺に事あるを機として輝元の西上を促し、

本願寺亦援を乞ふあり、信長の本願寺を陥れて大阪の要衝を占むるは、毛利氏の爲に頗る憂ふ可きことあるを以て、毛利氏は遂に意を決して水軍を遣はして糧を本願寺に納れしめ、織田氏の水軍を破り、猶義照は書を遣して、武田上杉の連合出兵を促し、毛利氏は將に東上して雄を上國に争はんとするに至り、二氏の和好は全く破れたり、當時武田氏の大に恐るゝに足らず、上杉氏亦容易に上洛を遂ぐる能はざること既に前述せるが如し、獨り毛利氏に至りては陸路は既に播磨に迫り、舟師直に攝海に浮ばず、京師をつく實に易々たるものあり、四圍の形勢斯の如き時にあたりて信長は安土築城の工を起せり、請ふ安土の地勢につきて述べる所あらしめよ

安土山はもと目賀田山と稱せしが、信長改めて名を安土と命じぬ、湖畔の平野に崛起して、風光の美を有すると共に頗る形勝の地を占む、江州の地道路四通中山道は美濃に通し、東海道は鈴鹿をこえて伊勢に出つ可く、北陸道は越前に通し、京師は即日にして達す可し、而して安土は殆ど之等諸道の要衝にあたり、加ふるに湖水舟運の便あり安土は四方經畧の根據策源地として、頗る好地位を占むるを見る、更に守勢的防禦の方面より之を見るも、近江一國四周山岳重疊、不破鈴鹿の險は東方を扼し、西面は則宇治川あり、椋木峠深坂越刀根越等の險は以て北方の侵入を扼す可し、之等四方の險要を塞がば近江一國敵兵の足跡を印せざらしむる又難きにあらず、而して安土は殆ど此國土の中央にあり、湖水は一面運輸交通の便を加ふると共に有事の日は亦以て安土の防禦にあつ可し、則安土の地は攻守共に形勝の位地を占め當時信長の領國中、中原經畧の根據地として最も適當ある地ありしが如し、

信長既に近畿を定めたりと雖も、北方に勁敵上杉氏あり、西中國には毛利の強あり漸く將に上國に迫らんとす、信長は勢二氏と衝突を免るゝ能はず、信長此際を以て安土に移れり、信長の意志は果して如何ありしか

築城以前に信長の行動と四圍の形勢とは既に畧之を述べたり、更に築城後に於ける信長の行動に徴して之を斷せんとも、信長の敵國に對する、常に巧妙ある外交手段を用ひ、難きを後にし易きを先にし、漸次我實力を養ひ、而して後強敵に向ふは其慣用方畧にして美濃を取り近江を平ぐ、武田上杉二氏に對する皆然り、上杉氏の兵猛烈精銳向ふ所摧破せざるあし、信長之と抗せば損する所多くして利する所少し、且其地北國に僻在するを以て、中原を定めて而して之にあたる未だ遅しとあさるあり、故に既に加賀を畧して謙信と衝突の端を開ける後に至りても、猶屢遣使贈問其歡心を得るをつとめ、又外交政畧によりて好を佐竹佐野伊達

の諸氏に通して上杉氏を牽制せしめ、而して越前には宿將柴田勝家あり、上杉氏に對する防備頗る嚴あり上杉家譜は安土の築城を以て、専ら上杉氏に備へんが爲ありとあせども、其防備既に斯の如く密あり、何ぞことさらに安土に築きて之に備ふるを要せんや、信長の目的は蓋他にあり、當時毛利氏は其東境は既に播磨に迫り、特に舟師直に大阪に至るの便あり、信長の中國經畧の急を要すること既に前述せるが如し、されば表面上未だ二氏和好を装へるの間に於ても、陰に毛利氏に備ふるを怠らざりしが、既に松永を滅し荒木を平げ近畿全く平定するや天正五年羽柴秀吉をして播磨に侵入せしめ明智秀細川藤孝をして丹波丹後に入り、山陰方面よりも毛利氏を侵さしむ、即安土移居後は信長は専ら力を中國の經畧に用ひたるを見る可し、蓋中國經畧の志は信長の久しく有せる所にして、四圍の形勢は更に其急を促せり、而して其本城岐阜は其未だ美濃の主宰たりし時に定めたる處、近畿畧服し其領地大に西方に擴張せるに至りては、地東方に僻して大領地を統轄するに便あらず、況や中國經畧の歩を進めんとせば、必ず其根據を進めざる可らず、而して其地は西方の經畧に便あると共に、かねて北方に備ふるに足り、政令を領内に布くに便ある地あるを要す、惟ふに京師の地は西方經畧の根據とあす可く、以て天下に號令す可し、然れども信長身征夷の職を帶ぶるにあら

ず、武門統領の門地あるにあらず、而して帝都の地に居らば徒に四圍諸國の猜忌を招き反抗を高め、敵に與ふるに我を責むるの好辭を以てするにすぎざらんのみ且や京師の地勢は永久の根據として武を暢ぶるに適せず、然れども京師一たび敵手に落ちば信長の不利計る可らざるものあり、主上を擁して我に臨むものあらば我亦如何ともあす可からず、京師は遂に他をして指を染めしむ可らず、安土は京師に至る一日程、以て其死命を制す可く、形勝の地を占めて以上諸般の便宜を有し、以て四方經畧の根據地とす可く、以て天下に號令するの中央覇府とあすに足る、されば信長は地を安土に相して根據地を定むるや、同時に京師に二條第を營み以て其在京の用にあてたり、信長の眞意畧窺知するを得可し、

以上述たる事實によりて之を察すれば、信長の事實は安土の築城を以て一時期を畫するを得可く、第一期は近國を平定して自ら根蒂を固め後顧の憂を絶つ準備時期と稱す可く、安土の築城を以て第二期の計畫たる天下經綸の大企圖に入らんとするものゝ如し、而して其第一着手として信長は先づ中國經畧の急を認め、自ら新城にうつり、着々として其計畫を進めぬ、信長が其築城の工事を督せる丹羽明智等を賞して、我近年の中に西國を征して汝等を鎮西の太守に封す可ければ、今より往古鎮西諸豪の姓氏を稱す可しとて、丹羽を惟住し改めしめ明智を惟任と改めしめたるが如き亦以て關西經畧の志は此築城の一因たりしを証す可し、されば明智軍記の

かくて天正四年正月十七日、信長卿仰出されけるは、岐阜の要害を城介殿へ相渡さるゝ上は、當所に在て更に無益の義に思召さるゝに付き、近江國を御居城にあさる可き間、各其用意可致とぞふれられける（中畧）強敵武田信玄死去によりて、其子勝頼を長篠岩村にて追ひくつしたまひければ、もはや東路の敵恐るゝに足らず、また越前北の庄の城には大身柴田勝家をさし置かるゝことあれば、次第に北國も可治、然ら

ば於東北信長卿御心元無きこと無之につき、御居城を被換、自今以後は中國南海築紫までも、切り隨へたまふ可き御所存ある可きとぞ申合はしける、さる程に織田殿御思慮やあされけん、目賀多山を見立て所の名を改めて安土と號して御普請あり（下畧）

と記せる者頗る其眞を得たるに近きが如し、然れども單に西方經畧の爲とあすは少しく偏見たるを免れず、上杉家譜の記するが如く専ら上杉氏に備ふるとあすもの、もとより非ありと雖も、北國のことも亦信長の毫も顧慮せざりし所に非る可く、之を要するに中國經畧の計畫は信長をして根據を安土にうつさしめたる主因かりと雖も、其地勢越前と聲息を通して北方上杉氏に備ふるに足り、殆ど領地の中央に位して、四通八達の要地を占め以て四方に號令す可く、根據として經畧の歩を進むるに便あるによらずんばあらず、而して其結構壯麗をきはめ雄大ある天守を起し、諸侯麾下の邸地を城下に配置せるが如き、其規模の壯大あるを見れば信長の志は此地を以て永久の城地とし四方經略の根據策源地とし、遂に政令を天下に布くの覇府を開くの地とあさんことを期せしものゝ如し、惜いかな城池成りて幾くあらず、中國の經畧漸く其緒につかんとするにあたり、本能寺の變禍不測に起り、希世の英雄恨をのみて中道に仆れ、安土の堅城工起りてより僅に七年、未だ大に其盛を極むるに及ばずして荒廢に歸し、今や即荆棘路を没して丘上總見院大相國の廟畔又訪客あく空しく狐狸の跳躍に委し、老松風に咽びて當年の遺恨を訴ふるが如し、英雄の末路また悲酸あるかあ、

貧家の子女に告ぐ

文 廼 舍 歌 麿

家、膝を納るゝに足らず、食、腹を飽かしむるに足らず、衣服に常主あく、囊中に一物あきは、これ貧家の

常態あり。

抑、人に貴賤貧富の別あるは、其淵源種々あるべけれど、多くは、平素の勤儉あると、否らざるに職由す勤儉は、人の美德あり。富貴の基礎あり。故に、人の此の世に處して、貧賤あるは、大に耻づべき事あれども、さりて生れながらにして、富み且つ貴きは、決して羨むべきにあらず。富家子女は多くは軟弱菲才にして、共に語るべく、共に爲すべき者あらざればあり。古來、英雄豪傑と仰がれ、義士節婦と稱へらるる者は、寧ろ、貧家の特産物あればあり。況んや、勉強は幸福を生む母にして、艱難は汝を玉にするものあるをや。

されば、貧家に生れし人ばかり、末頼もしく、且つ愉快あるはあらざるべし。嗚呼努めよや、貧家の童男。嗚呼努めよや、貧家の童女。

体操概歴

水野透

体操の起原は何れの國より起りしか未だ確知するを得ずと雖も或人は記して天竺ありと云ふ其説に曰く天竺の婆羅門宗徒等佛學を研究するに當りて躰育を顧みず晝夜勉強したる結果數多の僧徒等其身體の衰弱を來たして肺腦等の病患に陥り其業の成るに垂んとして天死するもの頗る多かりしより彼れ僧徒等始めて體育の必要を感じ快活ある運動を行ひ病を療治するに局部の運動を爲したりしに其術漸く進歩して終に按摩法ある勢婆羅門導引法十二法を工夫したり而して日々一定の時間に必らず堂宇の裡に會合して之を試行せしに其効果大に著しく身體の發育甚だ優秀にして健全無缺の者續々輩出するに至れり近頃歐洲の體育者中体操術は支那

より傳來せりとの説を爲す者あり以て体操術の起源は我亞細亞の東部ありしを察するに足ると然れども能く解剖生理の學に鑑み其原理を明かにしたる斯道の大家は歐洲にあるが如し彼の世人が今日奉して醫術の元祖ありとする處のヒポクラテスが就て學びたるヘロデコスの如き即ち体操家ありしと云ふを以て之を推知す可きか而して其体操にはリング式とヤーン式の二あり甲は柔軟体操の起原にして先づ行はれ乙は器械体操の元祖にして第十八世紀の初めに於て世に用ゐられし者とす

希臘國に於ては都府民漸く増加するに従ひ大多數の坐業者を生せし時に當つて大に體育を獎勵せり其スパルタ國の如きは古來体操を以て最も著名ある處にして其身體の育練最も完全の點に達したりき傳ふる處に依れば幼稚の時より強く筋肉を運動せしむる事を勤め男兒既に五歳に至れば馳走競争角力投鎗等を教へ七歳に至れば総て之を一所に集合して同じく之を訓育し嚴寒薄衣にして身體を凜烈たる霜風に暴露せしむる等種々の艱苦に慣習せしめ團隊に編成して粗食粗衣に安し驕奢に耽ることを禁じ爾後日々二回は必らず体操を爲さしめたり女子亦七歳に至れば体操を修めしむる事總て男子の如くにして只僅に激あらざるの異あるありしのみ斯の如くして壯健ある兩親を造り以て健全ある子孫を得んとせり故に以て遂に世人をしてスパルタ國は希臘國中最も健全ある人種にして此人種中には優秀ある男子ありと云はしむるに至りたり如此身體の育練に注意せし目的は専ら戰爭に在り故に此の國人戰爭に臨んでは最も強勇にして市民の外は城壁を要せずと稱せりと彼のアゼンスの如きスパルタ國体操の最美にして且其善良ある將士の輩出するを見て始めて身體と精神とを偏重かく同時に教育する時は大に効果あるを悟り体操を教育の一部と爲せり此教育法模範とあり遂に希臘諸洲に普及するに至れり此の時に當つて希臘の都府中到處に體操場の設けあらざるあきに至りしを以て人をして希臘國の都府と否らざることは体操場の有無に依つて之を分別すべしとの語を發せしむるに至れり(未完)

立志に就て

第五年級 廣部 智圓

千里に行かんと欲する者は、百里二百里の遠きをも遠しとせず、これ其希望する所遠大あればあり、之に反し、十里二十里の道を行かんと欲する者は、其望む所近小あれば、彼等に取りては前者の近しとせる百里二百里の道も實に遠大にして、到底想像だもあさざる所あるべし、凡そ何人と雖も、其望む所遠大あれば如何ある艱難も苦しからず、如何ある障礙も決して意に介せざるべし、然れども其望む所近小あれば些々たる艱難に遭遇するも、忽ち勇氣沮喪して又昔日の元氣なく、遂に一生を空しくして無爲姑息の裡に終るべし、されば苟にも身を立て名を擧げんと欲する者は、宜しく遠大ある志望を立て些々たる細事に齷齪する勿れ、由來我國民は其心甚だ小あり、從て其望む所も卑近あるは自然の趨勢あり、假に問ふて我國の最も高き山は如何、最も大ある湖水は如何、最も大ある川は如何といへば、誰しも必ず山にては富士山、湖にては琵琶湖川にては石狩川ありと答へん、今夫れ之を廣く世界の他のものに比較せんか、何ぞ其大あるを誇るに足らん琵琶湖の湖、大は即ち大あり、されど尙洞庭の十分の一たるに過ぎず、其他山川等を比較するも皆此類あり、悲哉、吾が日本國民は天然の地勢上、不知不識の間に不幸ある感化を受けつゝあり、されば彼等の小とせる所も、我國人は以て大とあし、彼等の卑近とせる事も、我國人は以て遠且つ大ありとあすべし、かるが故に我國人は自然に志望を小にし事業を卑近に求むるに至る、是れ果して邦人の特性あるか、否、吾人の先祖は決して今人の如く小心あらざりき、かく卑近ある志望を有せざりき、此等の事實は苟も我國の歴史を研究せし者の能く知る所あり、神功皇后の女性の御身を以て遠く三韓を征服せられしが如き、豊太閤の雞林八道を蹂躪して明國をも攻略せんとせしが如き事實に徴して其希望の遠大ありしを知るべし、かく吾人の先祖は大

膽にして其欲する所遠大ありしも、徳川幕府の世に至り、萬事保守主義を採り、列國との通商を禁じて鎖國の制を嚴行し、所謂島國根性ある最も忌むべき性質に養成せられしあり、故に昔日の氣象に乏しく、今日の如く眼前の小利にのみ齷齪として毫も遠遠の利益を計らず、況して百年の後世を達觀するの大才は得て求むべからざるに至れり、然れども近時或一派の學者は、頻に進取主義を鼓吹し、歐米の新知識を輸入せし以來漸く此弊の除去せられんとする傾向あるは、實に國家の爲め慶すべき一事ありとす、然れども由來吾が江州人は殊に深く此弊に陥れるが故に、今猶依然として革新の域に達せざるの感あり、見よ、我校四百有餘の青年は江州人を代表するものと見做して不可あかるべし、然れば果して我校の青年はよく偉大ある抱負を懷き高尚ある理想を貯へ居るか、余は大に疑あき能はず、若し余が疑を氷解せしむるの事實あらば我校四百有餘の青年の前途も亦實に有望ありと謂つべし、苟も一事を成さんと欲すべし者は、必ずや深遠ある理想を貯へ、偉大ある抱負を抱かざるべからず、たゞ漠然として確實ある希望なく、深遠ある理想なくして業を成し名を立てんと欲するも、豈に難からずや、

人或は言はん、徒らに志を大にし、理想を深遠からしむるも、何の益かあらん、寧ろ初は希望を小にして以て之に達し易からしめ、能く達する事を得ば、又更に一層大ある希望を立て、着々其歩を進め、漸次此の如くにして終に大事業を成就するに如かずと、然れどもこれ唯机上の空論に過ぎずして、到底成し得べからざる事に属す、前にも言へるが如く、欲する所近小あれば、瑣々たる障礙に遇ふも、勇氣沮喪してまた進む能はず、且つ未だ成功せざる以前に既に倦怠を生じ、決して大成功を爲し得ざるものあり、又人の情として、聊か得る所あれば之に安んずるに至る、一事業成りて又更に大ある事業に着手するの勇ある者果して幾人かある、加之希望近小あれば、比較的成就し易きが故に、從て油斷を生じ、遂には計らざる惡魔の誘惑の爲め

に一身を誤まる者少からず、されども初めに於て目的を遠大あらしめば假令些々たる艱難に遭遇するも、決して躊躇せず、如何なる悪友の感化にも感染せざるべし、且つ其成効比較的困難なれば、専心一意其事業に熱中するが故に眼を他に轉ずるの隙なく、又從て惡魔に誘惑せらるゝの患無かるべし、之を難する者或は言はん、豊太閤の未だ年少卑賤にして草履取たりし時、彼は能く後日天下の大權を掌握し、師を海外に出さんを豫期せしからんか、否然らず、決して彼はかゝる亂暴ある希望を有せざりき、彼は僅々一國の諸侯たらんことを欲せしのみ、而し既に之を得るや、更に天下を掌握せんと欲し而して既に之を得るや、彼は又更に支那朝鮮をも攻略せたと欲せしかり、かく一度成効して又更に大なる希望を立て、終にはかゝる震天動地の大事業を成効するを得しかり、されど不幸にして天は彼に壽を與へず、徒らに怨を地下に吞ましめしは、又人力の如何ともする能はざる所ありと、然れども斯の如きは實に異數あり、凡人の企及すべくもあらざる所あり、吾人若し猥りに豊太閤を學びて以て事實に成効せんと欲せば恐らくは失敗に歸せんのみ、新井白石曾て言へらく、生き王侯たらずんば死して閻羅王とあるべしと、方今の學者須らく白石の心を以て心とし、志は萬里の遠きを期し、而して一步の功を忽にする無くんば庶幾は震天動地の大事業を成すを得んか、

試験を論ず

第五年級 野村 靜軒

學生の境涯は親の臍をかちりつゝある間である。親は粒々辛苦、血の汗を流しながら喜んで學資をその子に給するのは、其の學成り業遂げむことを願ふからである、その子たるものは座して親の賜物を受け、悠々として學業に就くことが出来る、して見れば學生の境遇は氣樂なもの此の廣い世界にも又と無からう、然

し其の氣樂の中に一の重大なる責任がある、即ち親の望みに慚ふことである。人にして無神經でない以上は此の責任を解することが出来るものだ、しかるに方今の學生（悉皆とはいはぬが）は何故に學業に熱心あらずして、徒らに長日月を送るのであるか、此の責任を解することが出来るのであるうか、我れ學生ながら慨嘆に堪えんのである、了解らんのである。偶々一般に學生の通則として孜々汲々、晝夜を徹して學業に就事することがある、其れは外でもない試験勉強である。

其の學生が學校にあるや、全力を試験にばかり注いで、点数の一点、五分を競ひ席順の高下を争ふの外は何事も無頓着、緩急用不用を論じないで只教科書の暗記におはれ、維日も足らぬといふ者が多い、慨嘆の至りではあいか、言はゞ學生は試験の爲めに勉強するものである。斯く注入的に勉強した生徒は腦裡に永久保存することが出来ぬは言ふまでも無い、それに恐ろしい試験が來て暗誦が足らぬと種々不可思議の手段が行はれる、或は巧にカンニング主義で試験を誤魔化すのである、或は教師の眼をぬすんでスライを利用するのである。して見れば渠等の腦裡には全く自己的觀念、積極的氣力を失ふて何事も皆先輩に依頼して居るといふ傾向があるのだ。

我が國史を讀んで武士の如何ある者であつたかを見よ、又歐洲第十三世紀に於ける義騎（Chivalry）を見よ決して人の爲めに勉強したものでない、又一時の運命に驅られて勉めた者でない、所謂秩序的に勉めて竹帛に垂るべき人物とあることが出来るのである。

全体學生といふものは社會の蕾である、國家の花である、又天下の寶である、然り見よ賴山陽も學生であつた、ナポレオンも學生であつた、ミルトンも學生であつた、學生があくして大詩人、英雄豪傑、賢聖碩學の士があろうか、あゝ前途多望あるは學生ある哉だ。其の前途多望ある今日の學生が試験の爲めに勉強する様

か事では新世紀の社會を作ることとは覺束あいだろう、今日の學生は終生學生であいい、各自抱負する所に進み螢光雪窓の功を積んで中學から五年、其の五ヶ年の業を卒へたらば、歴々たる第二相續者たる中堅國民である、公義の爲に社會に出でる事は事をなし、私には家政の整頓をなし、人生の難路に處して社會を成すべき原素であるのだ。

抑も日本人が胃病の民であるといふのは食物に因るか、不養生に基づくか、この精細あることは宜しく専門家に聞くとして學生の胃病、腦病は何に原因するか、外であいい試験中に度を過して勉強するのが一原因である、その事は蛇足を加へて喋々するに及ばない。「健全ある精神は健全ある身体に宿る」といふ格言があるにも係らず、折角日頃は鍛いに鍛ひ、練りに練つたる健全の身体を一朝何でもあいい試験の爲めに傷けることは両親に對しても社會に對しても申譯があいい。今其の一例として中學校の卒業生が海軍兵學校や、陸軍士官學校の入學試験に、先づ体格で不合格とあるものが十中七八部を占むるのは事實である、而して其の病氣上句のやうな懦弱を身を以て、夫の長大強壯ある西洋人と世界の舞臺に競争を試みんとする、亦豈に心細く、片腹痛しの感あるであいいか。此の様を年輩の云ふ事を眞面目にあつて中學時代に生活する僕が、口に出すのは稍當を得ない様だ、併し僕は實際、点数の奴隷とあり、或は試験前にあつて徹日徹夜勉強いふ書物を暗誦し、或は胃病、腦病に取りつかない事を記憶して置いて戴きたい。

此にまた試験に就いて面白い逸話がある、盗人捕らへて繩をぬふのは未だしもである、其の繩にすべき藁を買ひ求むるに到つては愚の極といはねばならぬ、其れに同じく學生が試験と出會して暗誦するのは、未だ恕すべき点があいいでもあいい、其れを暗誦すべき記憶術の書いてある書物を暗誦記憶するに至つては、抱腹噴飯も當あらぬのである、奇ある逸話であいいか、又學生の有り得べきことと能く注意すべき逸話であらう。

要するに試験といふものは吾人學生を苦しましめる爲であいい、又腦病胃病を起させる爲であいい、只平素運動に傾けるを年に三回か四回か、學期々々に分けて修めた學課を復習せしむべき、言はゞ復習せしむるの一手段と考へて大謬は無からう、經驗論者の説によると「虎穴に入らざれば虎兒を得ず」「艱難の後に幸福あり」の金言を實履せしむるのが學生に於ける試験といふのも、亦一理あいいではない、御尤も千萬の説にこそあれだ。兎に角試験―試験とは恐るべきもので無い、何でも無い屁でも無い、平生から勉強する學生に取つては愉快であらう、何にも念頭に措く必要のあいい性質のものだ、然らば學生にして此の「試験位」といふ、ほんの毫程も勇氣さへあれば、試験の感化をうけて点数の淵に没し、イジメ根性とあることを免れ得るのである。

未來の社會を成すべき吾人はともに、試験の爲めに學ばずして人とある爲めに學ばう、喝。(完)

詭道

第五年級 廣瀬 文豪

兵は詭道あり、誰れも之れを聞いて怪しむ者はあいい、否、あいい所か、皆格言として崇拜して居る、而し若し世は詭道ありと云はんか、皆目を丸くして驚く、怒る、遂には惡漢とまでに云ふ、それはあまり解らんだはあいいか、單に銃や劍を振り舞はすのが戦争ではあいい、手に銳を提げ身に堅を蒙らあいいでも戦争は出来る、抑戦争とは争ふと云ふ意味である、即ち勢力の張り相ひ、威權の伸ばあいいから起る衝突だ、だから廣い意味から云へば世間の事は皆戦争と云ふことが出来る、然るに世間の人は多く此れを誤つて居る、戦争と云へば直ぐ日清戦争を思ひださ、そうして此の種の外には戦争はあいいと考へて居る、これは全く目が小さいからだ

又馴れて居るから分らんのだ、丁度魚が泥水の中に居て、其の泥水たるを知らぬのと同様だ、然らばその世の中の永續に行はるゝ、人の目に立たあひ戦争とは精しく云へばごんかものか、それは改めて解釋するにも及ぶまい、只「自分は今何をやつて居るか」と、こう考へれば、其のやつて居ることが即ち永續の戦争なのだ、いや驚くことはい、まあ自分は假りに學問をやつて居るとする、學問？其れは何の爲めにやつて居る、國の爲め又社會の爲めである、國の爲め、社會の爲めに其れが何の役にたつ、國が盛にある、社會が進むで来る、盛にし進ますのは何の爲めだ、民が安樂を得る爲めである、民に安樂を與ふるのにあてよう苦まねばあらかいか、さあそこが研究すべき所なのだ、太古の時代はシムブルである、未だ社會と云ふものが發達して居らあひ、食物や衣服、其の材料は地に充ちて居る、故に民は其の一身を支ふるに少しの苦痛も感じあひ、又戦争の起る筈もあひ、而し世が進むに従て人は殖へる、食物は缺乏して来る、そこで勢ひ強ひ者勝とある、而し個人々々の争ひは動力の多い割りに其の利が少いので進むで團體の争とある、即ち活動せる社會とある、活動と云へば如何にも立派をやうに聞えるが、其の實は只戦争なのだ、恐しい倒しあひなのだ、又事業とか職業とか、言へば如何にも物体らしくはあるが、言ひ變ふれば武器である、武備である、即ち人に勝つて己れを全ふる爲めの道具である、手段である、こう論ずれば誰れも永續の戦争を疑ふ者はあるまい、世に普通言ふ戦争とは只其の激發に過ぎあひのだ、其の性質に於ては少しも異た所はあひのである、故に其の之れに對する仕方も又同じであけねばあいか、即ち一つの戦争には詭道を用ひても差支へはあひが、他の戦争に之れを用ふることができぬとは云へあひ筈だ、然るに世人それを云ふて居る、否云ふて居るのではあひが、世間一般自然とそうあつて居るのである、で人が若しこんなことを云たからば、世間は其の人を詭辨家と云ふであらう、又破壊的人物と云ふでもあらう、然らば果して世人は其れを行て居らぬかと云ふに、前にも

云た通り皆行て居る、若しも行はあかつた時には恐らく世を渡ることができまい、殊に世が進むに従て益々之れが必要にあつて来る、疑ふからば、試みに正直一偏、赤裸体で以てやつて見るがよい、渡れるか渡れあいか、赤子あらばいざ知らず、苟くも十歳以上の子供であつたからば、とても其れでは行けまひ、若し強ひてやつたからば衝突や喧嘩の絶へる隙はあるまい、まして複雑あゝ、一寸先きは闇の世の中に立て、生存競争場裡に揉まれて居るものがどうして赤裸でゆけよう、昔アダム、イブ、が自分等の裸体あるを耻ぢて木の葉を纏ふたと云ふのも、單に其の外形の裸体あるを耻ぢたと云ふのみではあるまい、其の時から彼等は早や邪智がついて、己れの心をも包むと云ふことにも氣が付いたのであらう、そうであひとしても、其の体を蔽ふと云ふのは、既にそれだけ物をあらわに見せあひと云ふ考のあつたのが確である、其の頃は只木の葉のみで事足て居たのであるが、世が進むに連れてそれでは觀破せらるゝと云ふ恐れがあるので、木綿とある、獸皮とある、毛織とある、果ては遂に綾羅金縷とある、こうあれば世の中は實に之れ一つで演劇場とある、即ち其の裝飾の巧拙が世渡り上手下手なのだ、世間に才子だとか、謀畧家だとか云ふ人は丁度團十郎とか、菊五郎とか云ふ人である、即ち世渡の勇者である、チャンピオンである、

然らば詭道とは果して好いものであるか、又悪いものであるか、とは次に來る問題である、詭道あるものは善いものではない、無論悪いものである、曲つたものである、而し又止むを得あひものである、云い變ふれば自然の勢なのだ、だから此の詭道あるものは邪にして且つ必要あひものである、例へて言へば啄木鳥か、雀のようあひものだ、啄木鳥や雀は元來は木を啄いたり、果を啄いたりする悪い鳥なのだ、而し一方では大に植物を保護する、其の害と益とを天秤に懸けて孰れかと云へば寧ろ益鳥である、而し此の益鳥は其の性質は益鳥であひのだから、其の需用よりは度外に必要なあひ、若し無暗に此等の鳥を蕃殖させた時には却て其の植

物を倒す、詭道も此れと同じく必要は必要だ、而し元來の性質は惡だから、其の使いように因ては社會に大なる害を流すことがある、

道德と詭道、全く正反對である、道德は正直を意味す、詭道は此れに反して邪を意味す、曲を意味す、ところが、世の中には詭道が必要とすれば、勢ひ道德完全あるものと云ふことは出来ん筈だ、然り道德は無論完全なものではない、世の中に道德に因ることの出来ぬことがいくらかある、即ち世の中の事は皆が皆ながら道德と平行してやれるものではない、時と場合に因ては道德と抵觸することがある、抵觸すると云て此れをせまい時には、或は國の不利にあることもある、身の危きこともある、で場合に因ては悪いと知りながらも其れをやらねばならぬ、而し其れをやればどうしても道德の罪は免れることは出来ぬ、世の中の道德と云ふ大なる無形の帳面に其の罪は無窮に鐫り付けられる、而し其の心には露程も悪い所はない、純白である、赤誠である、只止むを得ずして其れを行つたのみだ、心には充分悔ひて居るのである、云はゞ其の惡行は心から出た惡行ではない、只外界がかく強いてさせたのだ、故に此の行を以て直ちに惡行とせるのは少し酷ではないか、他人の頭を憎いと思て打たのと、我が子の頭を可愛さの極打たのと、其の打た罪が同じいと云へようか、若し同じとしたならば、惡と云ふものは只打つとか、抛るとか云ふ其の外形即ち舉動に於てのみの名でかけねばならぬ、而し其れは暴論だ、餅もモチも同じ物だと云ふようなものだ、苟くも常識のあるものゝ言ふ語ではない、萬一其れが云へるとすれば、草や木の動いて他を打つのも咎めねばならぬ、而し草や木の動くことは誰れも咎めぬが、自然に反動と云ふものがある、人の行も其れと同じく譬へ心から出ないとしても其れ相當の報いは免れることは出来ぬ、かやうに譬へ報いを受けても、其の罪より大なる關係がある以上は、目を瞑てゝも其の罪を犯さねばならぬ、即ち人は事の大小を比較して時には罪を犯すことがある

之れは倫理の講話に於ても聞いた話だから之れで措いて、此度は道德と云ふものを研めねばならぬ、道德其のものゝ性質は一般に正直なものと認められて居る、然り無論道德の根本的性質は正直でなければならぬ而し酒の本性はアルコールであるが、アルコールのみでは飲むことは出来ぬと同じく、道德も亦正直一偏では世に行ふことが出来ぬ、世には或る正直さを稱して馬鹿正直と云ふて居る、或点から云へば馬鹿正直とは反對の様ではあるが、實際に於ては一致することがある、此れが即ち正直を以て直ちに道德と云ふことが出来ぬ證據だ、又道德はその他國の成立、時勢の變遷にも關係して居る、例へば支那の道德は直ちに之れを我國に行ふことが出来ず、西洋の道德は直ちに之れを東洋に持ち來ることが出来ぬやうなものだ、かく其の國々に因りて多少道德の差違はあるが、之れは仕方がない、若し無理無体にて之れは文明の道德だからと云て他の風俗も習慣も全く違つた國の道德を其のまゝ行はんか、いかに完全な道德でも其の功はなくて、却て其の國を亂す基とあるであらう、だから道德は何處までも其の國の風俗習慣と平行して行くことが必要である、詰る所を云へば道德あるものは、其の國の安寧秩序を保つ爲めの、一の大なる手段である、又甚だしく云へば詭道と云ふことも出来よう、一定不變のもので、何處の民も、何時の時代にも差閥のないものならば、それは無論天地不變の人道、永久人世の規則と云ふことも出来ようが而し世の所謂道德の如き變轉極りあきものが、どうして人世不易の規則、萬古不變の人道と云ふことが出来よう、即ち道德あるものはどうしても直ちに以て天地の眞理だと云ふことは出来ぬ、

然り道德は實に一つの手段に過ぎない、一つの詭道に過ぎない、而し其れは多く人の故意に作りしものではなくて自然の發達に近いから、手段と云ひ、詭道と云ふても、普通の手段や詭道とは幾分か眞理に近い、かくの如く道德は全く一つの手段(少し其の意には穩當ではないが外に名けようもないから今は假りにかく云ふ)

ではあるが世の進むに従て眞理に益々近くのは事實である、而し眞理其のものは有形的に殆ど極めることの出来ぬ、云はゞ無限と云ても差閤ない程のものだから、人間社會に於ては到底行ふことは出来まい、行ふことが出来ぬとすれば、人はどうしても絶對的聖人とあることは出来まいか、然りどうしてもあることは出来ぬ、而し道德は死物である、道德其のものには罪はないのである、善惡の判別はないのである、只人が其れを行ふて始めて善ともあり惡ともあるのである、即ち人の心に因りてどうでもあるのである、で心さへ潔白で、少しも恥づる所があれば、いかにある道德を行て居ても其の人は善人と云へるではないか、然りそれは云へる、確かに云へる、而し其の不知不識の間に行た罪、又は止むを得ず行た罪、それは前にも云た通り消へあい、長く消へることはない、罪を持た身でも猶善人と云へるか、云へる、先づ善人と云ふものの性質を考へさへすれば直ぐ其の言へる理が解る、抑善人とは賢い意味ではない、純白の意味である、無垢の意味である、然るに道德の善い惡いを判別するのは智の力である、即ち賢者の能である、善人の敢て知る所ではない、猶解り易く云へば賢あるものと、善あるものとは其の心の働きに於て全く異て居る、賢は智である、善は情である、情と智の異なる以上は又賢と善との相違あることは明である、

以上の道理から考へればどんな善人でも、どんな賢人でも乃至聖人でも、天國へでも生れあい以上はとても罪を逃れることは出来ぬ、孔子も人には誰れも過はあると言はれたが、此の過の意味は不知不識の間に行はれる過のみの意であつて、知りつゝやむを得ずして行た過の意味は含むで居らぬのである、而し世の中には前にも云た通りどうしても此の罪を免れることは出来ぬ、聖人と云はれた孔子でさへも著しき罪を知りつゝ犯して居る、此れから考へれば孔子も其の外に猶澤山の罪を犯したに相違ない、して其の著しき罪と云ふのは彼の春秋を著したことである、彼れ孔子は匹夫の身である、匹夫の身であつて肆に天子諸侯を毀譽褒貶し

たのは確かに僭越の罪を犯して居る、之れは單に予が外から云ふのみでない、孔子自身も自ら白狀して居るのである、其の外釋迦でも衆生を導くに種々の手段を用いた、即ち機に應じて法を説いた、釋迦のみでない大凡宗教家あるものは度々不思議なことをして、其の信徒をして益々其の信を深からしめることがある、實に之れ等は一つの手段である、世を導き人を安心立命せしむる爲めの一つの詭道である、確かに一つの罪を犯して居る、其の罪を犯して居る云はゞ罪人が、どうして佛だの、菩薩だの、聖人だのと云ふことが出来るかと云ふに、其れは云へる理がある、彼等は罪を犯した、欺いた、而し其の犯した、欺いたと云ふ罪は心からではない、心には一層善良あることを樂んで居るのである、故に彼等の心に於ては一点の咎むべき所はない、實に眞善美の徳を完全して居るのである、只其の社會に現はれ外面の行に罪があるのみである、彼等の心には欺いて居らぬのである、彼等の心に疚ましい所はないのである、即ち靈妙不思議ある所の、心の明鏡は少しも曇て居らぬのである、即ち彼等は其の精神に於ては光明を放て居るのである、彼等の魂魄は佛に成て居るのである、神にあて居るのである、而し彼等は此の社會に於ては罪を犯した、社會の人を欺いた、故に彼等は社會に對しては何處までも罪人である、社會道德の制裁は何處までも受けねばならぬ、此れ彼が社會へ出て來た義務である、故に若し支那に於て當時今日の如き、細密ある、而も嚴重ある法律があつたらば彼れ孔子は其の法律に服したであらふ、古へより多く宗教家が種々の名目の下に刑せられ虐殺せられるのは大抵此の理である、

あゝ社會は實に不完全である、衝突、矛盾、此れが社會の通性である、どうしても免れることは出来ぬ、即ち人は皆多少の罪を犯さねばならぬ、而し予は最後に臨で云ふ、譬へ世の中は矛盾だらうが、衝突があらうが、成る可く、能ふ限りは正直に、社會と衝突せぬように行くのが、此れが人世不變の一つ道德である、

厭世家論

四年級甲組 橋本 久 一

身は豪富の家に生れ、着るに暖衣あり、喫するに美味あり、温き家庭に育まれて、浮世の辛酸、人情の冷酷は夢にも知らざる中に人ごかりたる者は、其中心憂なく不平なく、視るもの聴くもの、一として樂しからざるはあく、謂へらく、人世は實にも愉快ある所ある哉と。之に反して、身は貧窮に生れ、肌を縊ひし襤褸は吹荒む木枯しの寒さを防がんによなく、飢て食を求むれども、一個のパンさへ意に任せざる境遇に、日々苦勞するものは、無心に戯れ遊ぶ稚き頃より、人世の苦惱、運命の悲哀を感じて、中心常に憂患を以て閉され不平を以て充たさるゝが故に、凡そ眼に觸れ耳に觸るゝもの一として嫌厭の念を起さしめざるはあし、謂へらく此世はかくも不快ある者かと。

かくて前者は此世を樂觀し、後者は之を悲觀す。されども彼等斯の如く、或は樂觀し或は悲觀すれども、之を以て直に前者は樂天家あり。後者は厭世家ありとは斷する能はず。試に見よ、かの初め樂觀せしものも、一度不治の難症に罹り、嗜む所の美味は口にする事能はず、日々苦樂を嘗め、臥床に呻吟せざるべからざるに至り、或は不時の災害に家産を蕩盡し、一族離散するが如きに會せば、必ずや曩に樂土とせし此世を憂勞絶えざる魔界の如くに觀するからむ。之と同じく初めは、窮乏の餘り世を悲觀せしものと雖も、一度幸運廻り來りて、昨の襤褸は今の絹布と變じ、前には一碗の飯さへ儘からざりし身が忽ち、美酒佳肴も意に隨て得らるゝに至らば、嘗て鬼のみ住める暗黒世界とあしし此世も、花香薫する光明世界と想ふに至るや必せり。是れ乃ち彼等が眞に樂觀し或は悲觀せざるの證にして、隨て眞の樂天家、眞の厭世家とはあし難き所以あり然らば果して如何あるものが、眞の樂天家にして、如何あるものが眞の厭世家あるか。

惟ふに眞に人世を悲觀し或は樂觀するは、さる兒戲的のものにあらず。普く百般の艱難を嘗め盡して、略人世の眞意義を解し、宇宙の神秘に疑惑を懐くの人にあらずんば、能はざる所にして、唯漫然、予は樂觀せり予は悲觀せりを稱する者は、未だ樂觀悲觀の意をすら解せざるもの、殊に朝に樂觀し、夕に悲觀するが如きは、識者より之を見れば、殆ど滑稽に近からんのみ。

然り而して、一般世人が思惟する所の、所謂樂天家は、樂天家に非ずして、樂世家也。厭世家に非ずして、厭苦家也。高樓に置酒し、美姬を擁して、快哉と叫び、社會の裏面には、飢に泣く貧兒あるを知らざる如き樂世家は何ぞそれ鄙野醜陋ある。一時の窮缺に意氣沮喪して、進んで其難境を切り抜け、對岸の花を手折る能はず、徒に人を恨み、世を果敢あむが如き厭苦家は何ぞそれ意氣地あきの甚だしき。かくの如き世人が所謂樂天家厭世家は此世に存在して、些の益もあきもの、吾人鼓を鳴らして、其無腸怠慢をば攻撃せざるべからず。かゝる輩豈に眞の樂天家厭世家と稱すべむや。

我國近來或一派の論者は、いたく厭世家を排斥し、罵倒し、以て世を毒するもの、人の思想を迷はすものありとあすものあれども、是亦眞に厭世家を知らずして、一般の厭苦家を目して、厭世家とあせるより起れる謬りあり。厭苦家の排すべきは前に述べたれば復曰はず、眞の厭世家果して何の害がある。

抑有史以來茲に五千年、又短しとせず、此間に現出し生存せし人類は蓋し無數ある併も此大多數の人類中、眞に人世を樂觀し悲觀せるものまた幾何ぞ。寥寥晨星を望むの感あり。而して彼等眞の樂天家及厭世家は共に凡人に超越せしは勿論あれども、就中厭世家に於て殊に然るを覺ゆ。

佛教三千年の始祖釋迦牟尼はいかに、はたナザレの聖者基督はいかに、彼は世を悲觀せざりしか。幾千萬無智の民が、己が欲する所に迷ひ、精神の安慰を得るに苦しみて無明の霧中に彷徨せるを見たる彼等は人世を

悲観せざるを得ざりき。かくて釋迦は金殿玉樓を棄て、雪山に苦行を修め、基督は、憐れある者を救はむとして、十字架上の露と消えぬ。されど彼等が我等に與へし恩恵は如何に大ありしよ。

且つやたとひ、厭世家を罵倒し、樂天家を稱揚するも、中心より世を悲観せるもの、豈他人の饒舌によりて樂觀するものからむや。所詮樂觀するものは樂天家たり、悲観するものは厭世家たるあり、何人も之を如何ともする能はず。況や樂觀必ずしも是にして、悲観必ずしも非あらざるに於てをや。

論者或は曰はん、釋迦基督はげにさもありぬべし。されど若し、衆民盡く斯の如く悲観し厭世家とあらば、世界は倏ち滅亡せむ、是を奈何と、されどこは杞憂のみ、取越苦勞のみ。世は論者の言の如き賢人のみあらざる也。彼等は運命を觀じ、宇宙を疑ふには餘りに愚かりき。餘りに冷やかかりき。

然も釋迦基督は、千載稀に見るの大厭世家あり。之を以て一般の厭世家に擬するは元より不當の極、失倫の至ありと雖も、たとひ釋迦基督よりは數十階も下れる厭世家ありとするも、猶斗宵の小樂世家よりは、遙かに勝れるものあるを見るあり。

夫れ近來道德の廢頹其極に達し、凡百の惡德非行日を遂ふて暮るの時に當りては、聊高潔廉耻の何たるを解せるの士は、終に其醜に堪へず、覺えず厭世の念を生ずるは禁じ難きに至る。此間に處して平然たるものは極めて大なる樂天家にあらざるば、一見嘔吐を催はすべきの小樂世家あり。然して極めて大なる樂天家を今日の社會に望むは、猶樹によりて魚を求むると等しく、終に徒勞に属せんのみ。是に於て現今の如く、風俗墮落して道義地を拂へる時代にありて、比較的良心に富むものを求めんとす、予は必ず之を厭世家中に於てせざるべからざるを見るあり。

眞に樂天、厭世の何たるをも解せざる世の群少論客、猥りに厭世家を排擠するを止めよ。

文章論

第四學年 野村 佐 一 郎

人此世に生れて見るもの聞くもの何かは其心に感ぜらむ此感動を口より發すれば言語とあり筆にて顯せば文とある、それ文の起るや元來言語は之を世上一般の人に傳へ難く且後世に残る能はざるを以てあり、されば言語は文章の代用あり思想の表あり即ち人に通するものあり是を以て文章は其趣味思想を第一とす或は人を泣かしめ怒らしめ或は其樂ましむるは皆趣味の如何による。

而して其文章を世に發表するや之れ賢者二三の人の爲にあらす普く萬人に示すものあれば勉めて平易を旨とせざるべからず、故に我現今の人に示すには今代の文を以てし支那人に示すには支那文を以てし歐米人に示すには歐米の文を以てすべきあり決して難解の語を用ゐるに及ばず若し然らずして己が智識に従ひて難解の語を用ゐんか博士の文は博士の外讀み難く邦人の文は外人之を解する能はず終に上下内外通意せざるに至らん又妄に古語を用ゐて得々然たるあり是れ誤れるの甚しき者と云はざるを得ず汝難解の語及古語を用ゐる人よ汝は知らずや文章は言語の代用あることを汝等居常人に語るに難解の語及古語を以てするか又汝等知らずや鬼神を泣かしむるの概ある文章も二三難解の語及古語の爲め平民は之を讀み得ずして遂に廢棄せらるゝ事あるを、近來漸く難解の語句文壇より日一日と形を隱せども尙古語は多く文壇に上り爲めに普通の國民をして讀むに苦ましむ痛ましき次第からずや文もし飾るべくんば吾は難解の語句を以てせんよりも普通の古語を以てせんよりも寧ろ巧みある文意を以てせん、さればとて又余りにいやしき言語を以て書くべきにもあらず言文其中を得文脈明に文辞いやしからざるを可とす。

要するに文は最も其趣味を尊ぶ趣味多ければ文辭従ひて整はん唯々それ文は趣味を尊ぶ之が爲めに高山にも

登るべし海岸にも遊ぶべし時勢をも見るべし而して其趣味を表はすや必ずしも英文に限らず漢文に限らず將た國文にも限らず唯其趣味に富める文を作らば天下の詩人あり其尤ある者即ち詩仙ありこれやがて神の人あり唯それ文は趣味を尊ぶ文に趣味あれば簿書記録と何ぞ撰ばん趣味は果實あり文辭は果皮あり唯それ果實の精良あるを尊ぶ。

築港と我國

第三年級 外村孝造

波濤の寄せ来る所、大河奔注するの地、是の文明開化の起る所ありと、蓋し文明と云ひ開化と云ふは、彼我相互の往來交通により、長短取捨し、以て研究を積みたる結果に外ならず、換言すれば、文明開化とは、交通の形を變じたるものに過ぎざるあり、且つ國家の發達するは、生産力の強盛あるにより、生産力の強盛は財路の開くるにより、財路の開くるは、鐵道船舶等の交通機關によりて初めて生出するものあり、試に思へ生産力頗る強大にして、物産如何に豊富あると雖も、之を需用地に供給すべく、運搬すべき機關にして、若し不完全ありとせば、果して、然らば、蓋し忽にして物貨の停滯を來すべく、物貨停滯を來せば、從て財路を求むるに由なく、財路を求むるに由なければ、ひいて生産力を萎縮せしむるに至らむ、交通機關の必要なること抑もかくの如し、されば是が根據地とあり、連絡点ともあるべき港の不良は、國家獨立上、緊要にして多大の關係を有するは、一目瞭然のことからむ、然れども凡そ事物は、天然にして吾人の意を満すべき物は殆ど稀あり、故に之をして有用ならしめんと欲せば、偏に人力によらざるべからず、一株の松杉、一片の布帛も、人力を借りてこそ初めて吾人を住ましむべく、温暖ならしむべきものとあるあれ、港に於ても亦然り、即ち是を完美ならしめんとせば、勢人力を経さるべからず、是築港の必要にして且つ起る所以あり

されば之によりて港を善良ならしむるを得んか、よりて生ずる所は、交通を完成して海陸の連絡を容易からしめ、商權を擴張して生産力を強大ならしむべく、以て富國の基を建て、國家の發達進歩を庶幾するを得べきあり、嗚呼築港の必要あること、豈大あらすぞせんや。

翻て我國の状態を達眼するに、幕末の騷亂はひいて明治の聖世を來し、以來日進月歩以て今日あるに至れり而してこの間に於ける國勢の進歩は、前古無比とも稱すべし、中に就ても、最も驚賛に堪へざるは、交通機關の進歩にして、其殊に驚くべきは我海事業の隆盛ありとす、今統計表によつて之を見れば、船舶は、明治二年西洋形船舶の私有を許可せられてより、同四年には、汽船帆船合して百二隻、登簿噸數二万八千八百四十余噸ありしもの、明治三十四年(七月末)には、一躍して四千三百五十八隻、登簿噸數無慮六十四万余噸とあり、之を操縦する海員は、殆んど一万五千四百人に上れり、其航路の如きも、歐洲線米洲線を初め、千差万別、之を擧ぐるに暇あらずして愈々盛大に趣かんとす、然るに何ぞや、未だ吾人は一二を除く外、之にもあはるべき舊港の改良を耳にせざるあり、是所謂本を遺れて末に走りたる感あき能はず、而して、尙ほ國家の發達を希望せんとするは、恰も木によりて魚を求むるに等しきのみ、されば現今我國に於ける築港は、緊要あること夫れ焦眉の急とも云ふべきあり、故に若し之をして等閑に附せんか、或は自然の趨勢に逆て、遂には國運を沮滯する恐れかしとせず、是識者の夙に憂ふる点にして誥嘆に堪へざるあり。

之を要するに、國家に於ける港灣は、恰も身体に於ける心臓の如し、即ち身体を健全ならしめんと欲せば、之れが榮養分の供給を充分からしむべき、心臓を健康にせざるべからざるに等しく、國家をして益々發達せしめんと欲せば、之が榮養分たる財貨の供給を、完美ならしむべき築港に依頼せざるべからず、されば築港は國家の進歩に従いて、必然起るべき、否か起らざるべからざる現象あり。



紀元節祭場の諄辭

特別會員 文 廼 舍 歌 麿

源盛りにして初めてその河の流の遠きを望むべく根ざし深うして初めてその木の生立のよろしきを頼むべし我が國初まりてより此のかた既に世を重ねること百二十二年を積むこと二千五百六十三年の久しきに至れども天津日嗣の高御座は天地のむた限りなく常磐堅磐に動きなく彌榮にさかえまして我が公民は代々の帝の大御恵の露に浴みてうら樂しくうら安けくまひ來れるは偏に神日本磐余彦天皇がその昔かしこくも大和國の橿原の底津岩根に宮柱太知立て高天原に千木高知りて千世萬世に動き無き皇御國の基を定め給ひしめぐみに據らざらめやその源の遠きこと此の如くその根さしの深きこと亦此の如し天の下廣しといへども國民多しといへども我が國の外に我が國なく我が民の外に我が民あきは素よりその所ありそのめでたき其樂しさ獨り我が國民の専らにする所にして誰かこれを夢にだに知ることを得べき」

あたかも今日はこの大御業はじめのめでたき日の巡り來れるまに伊佐庭を我が學のやに設けてかしこみつつ遙に拜み奉れば畝火山高く空に聳えていかきの松いみじう神さびたるのみあらず嵐の音さへ幽かに聞ゆる心地していともく尊くあむあめでたの我が國やあな樂しの我が民や」

月嶋丸と共に沈没遭難せし亡友を悼む

孤 帆(舊稿)

世に悲しきこと多しと雖も、何事か、此悲みに勝らむや。去年十一月十七日、商船學業練習船月嶋丸は空しく海底の藻屑と消えぬ。此果敢なき最後を免れざりし船員總て百余名、さらぬだに一掬の涙を注がざる者はあらざるべきに、余の親友も、亦、其内の一人ありき。此報、一たび新誌に見はれしより、無事を祈りし世人の心づくしも、空だのめにて、遂に沈没と認めざるべからざるに至りぬ。夢の如く、幻の如く、信せむと欲するも、信じ能はざるあり。

余は君と竹馬あり。否、寧ろ、此世に生れ出づる前よりの友垣ありしからむ。君の性質を知悉する者、恐くは、余を措いてあらざりしあるべし、君は實に大抱負を以て海事に従事せしかり、而して、一朝暴風の爲に身を千尋の海底に横ふ、之を花に譬ふれば、馥郁たる梅花、未だ蕾ながら、春寒深うして霜雪に痛みし也、此一編、君を忍ぶのよすがとする者、此を草する時、過去二十有餘年の事浮び來りて、心は是より彼に、幻より影に、一去一來、紛糾錯雜して万斛の涙逆らば九泉にも通ひあん、

君は性淡泊にして一見粗漏の如く見えしかども、學問に忠實にして、両親兄弟、さては朋友に對して、甚、熱濃ありき、君が中學校を卒へて、商船學校に入らんとせし時、余は婆心的に之を否定したり、然れども我國海運未完からず、君見る處ありて、遂に、身を海事に委ね、以て大に貢獻する處あらんとす、其頃余は獨り柳河にありしが分袖の情禁じがたけれども、大志を抱きし君を止むべくもあらず、遂に笈を負うて君は東上しぬ爾來思を孤雁片雲に寄するのみありしが、回り來る暑中休暇は二人が平素の鬱を洩す最樂しき時にてありき草深き余の茅屋は避暑數句の二人が天地にてありし也、繁れる尾花の間より、月さし登る時、まだ夏ながら

初秋の虫の音庭の草葉にすだき初むる夕、都門の塵に飽きたる君は必余の家を訪れつ、媒する一瓢の醺、君先づ語り、余之に和する時、心陶然として風雲に駕するが如く、月も笑ひ、虫も歌ふかと思ゆるは、温き君が心の余が眼に反映するを以て也、若し崇高ある自然の美を感受する者は、文學者といふを得ば、君は慥かに少詩人ありき、余が南溟の號を與へしも、其比の事ありしにや、

世に虫が知らずといふことあり、余は凡庸愚人の囁語として笑ひ居しが、其真理あるを悟りき、凡そ人の凶事に逢はんとする時は、周圍の事物に心を置くこと甚しく、神經自然に過敏にありて、風聲鶴唳にも心を轟かすことあり、今より思へば、去年の暑中休暇は、所謂虫が知せし最後の交りありし也、丁度其時にてありき、余は用を持して旅行せしが、泊すること四日、柳河に残りし君が心元あれば、急ぎ柳河に歸り、先づ君の家に至りしに、君は將に出立せんとする刹那にて、車は君を門前に待てり、悲哀、憂愁、あらゆる感情は、余の心を驅りて、眼底迷る涙を禁じ能はざりしに、時は刻一刻、吾人の命を縮めて、君は既に門前に出でぬ、無限の恨、無量の思を込めて君は車上余を一瞥し去りぬ。嘻、こは君が最後の一瞥ありしか、

余は君の出立に後るゝこと十數日、九月下旬、福井縣に奉職すべき身となりしが、十一月十日の事ありし、君の手紙は室蘭より余の許に達しぬ、見れば例の眞率ある文字にて

小生は去月着京後月嶋丸に乗じ遠洋航海最後の練習を試み只今太沽より箱館を経て當港に來た二三日の内坂錨駿州清水港に立ち寄り歸濱の上航海を終ふる筈依つて清水港碇泊月嶋丸宛にて手紙を出せといふ意にてありき、余は命に應じ、清水港宛一書を送りしに、意外、其後の新誌に月嶋丸行衛不明の字あり、胸轟きつゝ、毎日新誌を見たりしが、遂に沈没と認めざるべからざるに至りつ、公にもそを認めけん、先きに送りし手紙は受取る人あくて、十二月の半比悄然として返り來りぬ、君が残しゝ數通の手紙、讀みも

て行くに、爛熳たる君の品性見はれて、面影に接する如く、雨の夕、風の晨、物につけ、事にふれ、人知れず涙にくれしこと幾度あるや知らず、君が愛せし横笛は、今余の家にあり、思ひきや、こは君を忍ぶ紀念とあらむとは、試みに、月清き夕取り出してふきすさば、切々の音、怨むが如く、訴ふるが如く、斷腸の思あり、

嗚呼、避暑休暇、昔、樂しかりしは、今は仇とありぬ、今年八月、歸省して、君と賞せし故山の風物に接する時、余の情緒如何あらん、君は既に一個の位碑と化し終りしか、豆南の大海逆巻く大波に運命を覺悟せし時、親あり、兄弟あり、姉妹あり、朋友ある幾多有爲の士の、心、如何ありしか、過ぐる明治三十二年の秋同窓片桐氏は、是も實地航海中脚氣症に罹りて箱根の客舎に没しぬ、當時、君は哀悼の餘り、一通の吊文を綴りたりき、而して今や君又跡を追うて人に吊せらるゝに至る、諸行無常、老少不定の理は、言ありたれど今もかわらぬは、有爲轉變の習、是生滅法全滅々已の教は、さることながら、誰か、寂滅爲樂と觀せむや、よし、吾に無爲正覺の力をくして、永劫に輪廻するもまゝよ、此恨綿々としてつきたる時あけん、嗚呼南海波荒く、魂魄長へに海風に咽ばん哉

こはよしあき舊稿あれども雜誌係の責ふさぎにとてかん

四國だより(第一回通信)

新井 無二 郎

「いあづまや、きのふは東けふは西」こぞの正月は琵琶湖畔にて食べし雑煮餅も、こぞしの春は四國の海にて年を迎ふ。慣れにし處が住み憂きか、慣れざる處が住みよきか、情に支配せらるゝ人間の悲しさは、見る事

聞く事、話す人話さるゝ身、いづれ冷やかあらぬかは。さもあらばあれ、只天地自然の眼界の新あるのみぞ心やりの友ありける。

今日學ばずして、來日ありといふ事勿れとかや。新天地の景に接する者も、まことに此の心得あかるべからず。おのれ彥根に在りし時も、近きあたりの觀風はいつにても得らるゝものあればとおもひたりしうちに、遂に八景の一つをも見で終りしは、たま／＼樂浪や志賀のあたりに來りし甲斐もあく、拙きことの限りありけり。匹夫の用意常に此の如し、されば、こたびはこの轍をばふむまじと思ひてあれど、葦分小舟さはおほみ、事はまた志と違ひあんとするぞねたきや。

富岡町は、もとは一小漁村ありけむ、徳島市を去ること、陸上六里、地は僻にして交通機關の便に乏しく、所謂山村水郭の一小街あり。徳島市より、海路定期船の往復ありて、陸上よりも便利あれども、此の蒸氣船頗る珍無類の代物にて、支那李鴻章の所有船ありしといふ、機關は外車にて、水を蹴る有様、川瀬に用ゐる水車めきたり、とても現世紀には見得べくもあらぬ奇觀あり。さればその速力も甚だ鈍く徳島より殆三時間を費せり。但しその間風波の難とてあらねば、乗客は陸路よりも、遙に氣安く室も亦大阪商船會社のよりは清潔にて廣し。

田園生活のさまたちの如しといへども、利害は並び存せざる習ひ、氣候人情は、阿波第一位の價值を有す。南海の暖きはさるものにて、當地はここに温和、嚴冬春寒の季節と雖、中國東海道、三四月の陽氣にて、雪を見ること稀に、時々遠山の頂の白きを望むのみ。交通機關の具備せざる結果は、直に人情に影響して、大抵朴素淳厚あり。徳島市の如きは、物貨の集散、交通の頻繁に伴ひて、人情とかくの評を免れざれども、僅に六里を隔てたる富岡は、全く天外の新天地にて、山青く水白く、蝶舞ひ鳥歌ふの處、新築校舍に咿唔聲の

の漏るゝは、やがて中學校ぞと知らるべし。ひあにはあれど、阿波一國の模範學校を以て稱せらるゝは、富岡人士のために嬉しからぬかは。短艇半里にして海に出づべく、鮮魚は五錢を投すれば、一家三四口の膳に上るべし。夏は海水浴場の設ありて、海邊の白沙青松の勝地に粟島神社あり、土俗の信仰最も厚く、遠來の參詣ありて風景第一のよしあれども、おのれはいまだ行かざれば、縦に筆を走しがたし。

今一ツの勝景の地あり、津の峯といふ、山の麓に添ふて分け入ること半里餘にして達すべし、こは余もすでに一遊を試みぬ。山巔には津峯神社ありて頗る宏壯、境内廣やかにて清潔あり。茶店ありて、新築の樓は眺望絶佳、渺々たる蒼海は、眼下より起りて遠く雲に連るところ、紀州の山々ほの見えて、沖の小島の島かげをわたる白帆の三々五々、眠を破る漁笛の聲に、飛ぶや鷗の三つ四つ二つ、磯山さして落ちてゆく。

明谷といふ處に梅林あり、聞ゆる名所ありといはれて、去る土曜の二時より、同僚二十人と、酒一樽、鯛十枚を携へて、見にゆきぬ。富岡より二里、山間の小谿を挟みて、一帯の白雲、山の裾をめぐるを見ゆるは、花先づ心ありげあり。暗香薫る下に席を設け、谷水を酌んで茶を煮、酒を温めて鯛を割く。淡くして情密に、微醉、興却りて深し。遂に月をふみて歸りぬ。(二月十九日)

馭者物語

第五年級 澤村 胡夷

うら寒い風が颯つと一陣、竹藪の彼方より怪しげな叫びを立てたかと思ふと、動揺た熊笹が再び舊の位置に返つて其餘勢を葉と葉の摩れる音に留めて、山越しの春風は、忽ち數十町の彼方へと馳せ去つた。細い野路の直ぐ横手の畑には二三寸許りの麥が、露に濡れたのか、雨に洗はれたのか、それとも今の風が扑したのか、

さも重さうに緑りの葉を亂して居る。畑や田の窪んだ所々には消残りの雪が斑にあつて冬の面影を留めて、一二分許りの草の芽は温かい春の光を待顔にその一端を土塊の間隙からぬつと突出して、その上を淡い力無さうな太陽の光線が射ると、其處此處より湯氣がぼか／＼と立昇つて急に土の香が紛と鼻を衝く。直ぐ脚下には細い小川が奇麗に、恰度、水晶のやうな色に森の彼方、明神の祠に近い深い淵から流れて来る。この小さを流に沿ふて下つて行くと、新河へ流れ込まうとする見付に一軒の家がある。形式ばかりの庭にこれはまた不釣合な大きな榎樹があつて、一方、新河に面した方には絶えず水車が廻轉して居る。勿論、新河には水の絶れた事が無いと言ふのだ。

倒れさうな、茅葺の、野中の一軒家、この家の主人公は何んか人であらう？

水車場の右手にはこれも亦奇妙な厩があつて、而かも勇ましい馬の嘶き聲さへ聞えるのである。

作爺……水車場の作爺と言へば直ぐ此家の主人公だと言ふ事は五つ六つの小兒でも知つて居る。また、『六』と呼ぶ馬を飼つて置く事も知つて居るので。これは水車で搗いた米や麥を里へ運ばふとするのには是非必要なのだ。その又、運ぶ時の様子が面白い、恰度、希臘の名畫にでもありさうなので。この作爺が餘り廣からぬ野道を里の方へと小さく馬車——勿論、形式許りの——の馭者臺でも言ひさうな場所に、驕慢な、而かも得意氣な風采に、恰度、半ば馭者、半ば主人公と言ふやうな姿勢を取つて、主人公を氣取つた時には悲壯な聲を野に響かして追分を唄ふ。馭者を氣取つた時には胸をぞらして鞭を上げるや否、『唯ッ！』……この『唯ッ！』といふ聲を聞く時は、泣いて居た小兒でも直ぐ機嫌をかはして表口へ飛出すのである。一日に一度、さつと、この『唯ッ！』が村の入口で聞える……雨が降つても、風が吹いても。

自分は今、ハイチの詩集を懷中にして、抄らぬ足を何時のやうに下流へと運ばせるのである。『われはガンゲ

スの野に近き美はしき地を知る』と言ふたかの詩人の所謂美はしい地！とは何んを所かのであらう？『くれある匂ふ花園』とは如何な園生であらう？自分はこんな空想に耽りながら、何心なく空を見上げた。その途端に雀が二三羽彼方の田から飛んだと思ふと、かの水車場の戸口から馬の頭がぬつと突き出て、前脚——胸——胴——後脚——その後ろから作爺がひょこりと顯はれた。

作爺は馬を追ひながら、早や自分の方へと近いて来るのである。馬は何故か立止つて、つと首を延べたと思ふと河の水を飲むのであつた。自分と彼等との間は五六歩に過ぎない。爺は眠さうなその眼を見張つて、自分に一寸會釋した。『爺さん精が出るね——』と聲を懸けると、『大分温かうあつて結構で御座ります』と木に竹を接いだやうな返事、驚いた、爺さんは馬を一心に凝視して居るんだもの。

彼は今、自分の方を向いて、不揃いな亂杭のやうな齒に煙管を銜へ、手で風を圍ふて、粉煙草に火を附け、水衣の奇麗な小石に腰かけた。自分はその側に踞んで、一心に馬の様子を見て居る。作爺は楽しさうにまた馬を眺めて、自分に話しかけた。

『御覽あさい、此水の奇麗な事、この水が何處から流れて来るのか御存知あるまい、いや、これを知つて居る人は無い筈のじや……』

『この水？……この水は神宮瀧からだらう』

『いふや』

『ちがふ？……じやあ——何處からだらう』

と小頸を傾けると、小さく聲で

『上流からじや』と獨語いて、くま／＼と笑つた。これだもの、この爺さん中々油斷せられあいのである。眞面

目で問ふて置きながら、人に戯からふのだ。

自分は立ち上つて、河を越えて遙か前方に眼を注いだ。畑——田——池——その間に二三本の樹が植えられて、その彼方の森の横手には小牛のやうな小山がある。是れは自分等の悪戯盛りの時の記念なのだ。

小西郷や、小秀吉を氣取つた多くの腕白が、この小山の麓で合戦を初めた時、自分も其處に餓鬼大將の一人として、かの中回ち處に陣取つて居つた事ゑどが、今、ゆくりなくも思ひ出されて、當時の小西郷や、小秀吉がいま、小山の彼方の田の中に牛を追ふて居るのかと思へば坐ろ自分は一種の感に堪えきれないのである。また、其時、ナポレオンを氣取つて居つた自分が、この瘦せこけた面輪に、人の運命を泣いて居るのを見た時には、彼等は一層追懷の念にうたれるであらう。

作爺は眞白あその頭髮を、今、野を越えて吹き渡る春風に翻弄せられて、靜かに吐いたその紫の煙は、一二度渦を捲いて、うら寒い春の野に消えて了ふた。細いその眼を上げて、何か急に思ひ出したかのやうに、作爺は自分に寂びた聲で話したのである。

『若い方を見れば直ぐ自分の若い時の事が思ひ出せるので御座りませう。この平和な春の野に、ゆるう流れる小川を眺めながら、この白髪爺の皴物語、何うやら、晝にでも在りさうで御座りますかアハ、ハ、ハ、……若い方々は御存知で御座りませう、あの月照と申すお方——さう申して御了解にありませんまいが、わたしの若い時——わたしでも若い時は一度ありましたぜ——わたしの若い時に、少々とした事で村を逃げ出して、京の清水の産寧坂に奉公をした事が御座ります、京の清水、月照さまが居えた寺で御座りませうア——』

まだ西國へお落ちに成りませうだ時で御座りました。日頃、自分は観音さまを信心にして居りましたも

ので御座りますから、毎朝參詣致しましたが、不圖した事からその寺男と心易うありまして、遂々、あの月照さまに見こまれて、二三度、内所で文箱のやうなものを薩摩屋敷へ持つて行いた事も御座りましたある夜、伏見のさる宿屋へ同じく文箱を持つて、伏見街道を走つて行きますと……さうで御座りますか、それは恰度、夏の事で……

といふた時に彼は何が恐ろしいものでも見たかのやう、眼を見張つて頻りにその時の有様を回想して居るらしい。煙管の火は消えて了つて、吸殻が白う雁首に詰つてゐるのも構はず、煙の來をいのをスバ／＼と吸ふて、火の消えたのに心附いたものか、驚いて、急に手に取りおほした。

闇はあやかし、伏見街道をすた／＼と走つて行きますと、餘り急いたもので御座りますから、武士らしい方に、ごんと衝き當りました。『和郎は誰じや、おほれッ』と言ひあがら、うんと白睨むやうな體をとりまして、『おほれッ』と申しました、……無理で御座りませア——、闇の夜に灯提も持たずに、お互に衝突つたのですもの、此方は大切お使を申しつかつて居る者、もし、こんな事から、大變が持上つてはと、言をもいはず、闇を走りました、『狼藉者、待てッ』と聲をかけましたけれども此方は一生懸命で、餘程、手の鋭いた者らしい御座りました。やッと言ひ様、小石をわたしの眞額へ發矢と投げて……から／＼と笑ひあがら京の方へ行きました。わたしはそんな事はかまう所じや御座りません。一生懸命に闇から闇へ、息の切れる程走りつづけました。

その時の傷がこの額の……それ、ここに小さき傷の痕が御座りませう。これで御座ります、これがその時の傷かので……

首を垂れて居つた馬は何に驚いてか一寸身を動かせた、その機會はづみにその片脚は清い清い流れの中へざんぶと